アメリカ史学会 第 62 回例会(修士論文報告会)報告

日時：2025 年 4 月 26 日(土)　13 時 30 分～16 時 55 分
場所：共立女子大学・神田一ツ橋キャンパス本館 204、206 教室

204 教室
第 1 報告
報告者：倉岡玲弥（一橋大学大学・院）
タイトル：「アメリカ生まれの帝国臣民―外務省の留学生教育と「残日 2 世」」
コメンテーター：　南川文里（同志社大学）

第 2 報告
報告者：菊本 雅人（京都大学・院）
タイトル：「1960 年代～70 年代アメリカにおける環境意識の形成と宇宙政策への影響―トランス・サイエンスとしての宇宙デブリ問題」
コメンテーター：生井英考（立教大学）

第 3 報告
報告者：出川耀子（同志社大学・院）
タイトル：「米国における日系ラテンアメリカ人の永続的な闘争―権利を求めた八十年」
コメンテーター：秋山かおり（大阪大学）

206 教室
第 1 報告
報告者：孫有眞(東京大学・院)
タイトル：「黒人自由闘争におけるグローバルな連関―『エボニー』誌とエラ・ベル・トンプソンのブラック・インターナショナリスト・フェミニズム―」
コメンテーター：兼子歩(明治大学)

第 2 報告
報告者：一木優花(東北大学・院)
タイトル：「公民権運動における黒人女性活動家の困難と貢献―SNCC(学生非暴力調整委員会)の事例を中心に」
コメンテーター：川島正樹(南山大学名誉教授)

なお、登壇者の所属はいずれも 2025 年 3 月時点のものである。

204 教室　参加記

第 62 回例会では 5 名の修士論文提出者の方々が報告をしてくださった。なお、時間の都合により報告は二教室に分かれて行われた。以下は教室 A で行われた倉岡玲弥氏、菊本雅人氏、出川耀子氏による報告の記録である。

第一報告として倉岡氏が修士論文「アメリカ生まれの帝国臣民―外務省の留学生教育と「残日 2 世」―」について報告した。1930 年代、日系 2 世の中で日本留学が流行し、外務省を中心とする日本政府も留学生教育に参画した。留学などを通した日系人と日本の紐帯に着目した倉岡氏は、同時代の出版物や公文書館史料を用いて、「残日 2 世」を日本における差別の被害者や国家主義的教育の対象となった客体としてではなく、日本における生存・社会的上昇という合理的理由から「帝国日本を利用し」、「外務省による留学生教育を作り替えた主体」と位置付けた。倉岡報告へのコメンテーターとして、南川文理氏は本論文が「アメリカ生まれの帝国臣民」という独自のエスニック・アイデンティティとしての「残日」の経験を掘り起こした功績を評価したうえで、エスニックスタディーズの評価にみられる本論文のオリジナリティと、日米戦争後の「残日 2 世」の立場の変遷という、掘り下げるべき二つの論点を提示した。また会場からは、「残日 2 世」が本国での人種差別への抵抗者としての側面を持つこと、「残日 2 世」の出自や経歴、つながりを持つコミュニティについて、さらには、（特に会場の修士論文執筆者に向けて）先行研究の選択方法などについて質問があった。

第二報告として菊本雅人氏が「1960 年代～70 年代アメリカにおける環境意識の形成と宇宙政策への影響―トランス・サイエンスとしての宇宙デブリ問題―」について報告した。1960 年代から 70 年代にかけて、環境主義からの批判を無視できなくなっていった NASA が、自らを「環境機関」として積極的に売り込み、特に地球上の自然環境を汚染する宇宙の環境問題と位置付けた「宇宙デブリ問題」に取り組んだ。菊本氏は、NASA 本部歴史アーカイブズおよびアメリカ国立公文書館新館の史料を用いて、環境主義の高まりという国内・国際社会の大きな潮流が NASA の宇宙開発に及ぼした影響を明らかにした。菊本報告へのコメンテーターとして、生井英考氏は本論文における政府、NASA、市民社会、環境主義の複合的関係性を整理したうえで、NASA の動向を官僚組織としての生存戦略の一パターンとする見方、さらに環境主義の議論における研究者、官僚、市民運動家など様々なアクターの視点を提示した。その上で、環境主義については特に政治的過程や社会運動としての側面から、そのアクターについてより精緻な分析が必要であると指摘した。会場からは、本報告のオリジナリティについて、NASA に対する環境レイシズムからの批判について、冷戦やソ連の動向を意識した安全保障上の戦略やアメリカ例外主義の影響について質問が寄せられた。

第三報告は出川耀子氏が「米国における日系ラテンアメリカ人の永続的な闘争―権利を求めた八十年―」について報告した。第二次世界大戦中、約 2,000 人の日系ラテンアメリカ

人（JLA）が捕虜としてアメリカの収容所に連行された。戦後は 300 人以上の JLA がアメリカに帰化したが、日系アメリカ人が主導する補償運動（リドレス運動）では日系アメリカ人たちと同等の補償を受ける権利を否定された。出川氏は当事者から収集した豊富なインタビュー史料を用いて、1990 年代に補償をもとめて立ち上がった JLA たちの経験を掘り起こし、その歴史的意義について検証した。これに対してコメンテーターの秋山かおり氏は、本論文のリーガルヒストリーとしての価値や本論文が依拠した膨大なインタビューの史料的価値を高く評価した。その上で、本論文が依拠した史料の出典の明確化と議論の理論的な精緻化、「コンスピラシー」という議論設定や「Hidden History」と位置づけることの妥当性について検証が必要であると指摘した。会場からは、オーラルヒストリーを収集する上での倫理規定やプロセス、「語ること」を拒否したインフォーマントの背景、さらには JLA が置かれた「無権利状態」に関する質問や、議論をより広いストーリーの中に組み込むことの必要性などについてコメントが寄せられた。

倉岡報告は「残日」を、出川報告は「日系ラテンアメリカ人」を通して不可視化されてきた日系人の歴史を多彩な史料を駆使して掘り起こしたという点で非常にクオリティが高い報告であった。環境主義を内面化していく NASA に関してアメリカ現代史、環境史、宇宙開発史を横断する野心的テーマを扱った菊本報告からも大いに刺激を受けた。第三報告からは計 45 名の参加者が同一教室に集まり、盛況のうちに例会を閉じた。

文責　野口久美子（明治学院大学）

206 教室　参加記

第 62 回例会は例年通り、2024 年度に提出された修士論文の報告会として実施された。今回は 2 会場に分けての実施であり、本記録では教室 B にて報告された修士論文について、その概要と行われたディスカッションをまとめる。

第 1 報告では、孫有眞氏が修士論文 “Global Connections of the Black Freedom Struggles: Era Bell Thompson’s Black Internationalist Feminism in *Ebony*” について報告した。孫氏の研究は、黒人向け雑誌『エボニー(*Ebony*)』で編集長および国際記者を務めたエラ・ベル・トンプソン(Era Bell Thompson)を題材に、彼女のレイシズムへのトランスナショナルな眼差しと、「ブラック・インターナショナル・フェミニズム」の形成過程について論じたものであった。『エボニー』は「黒人の、黒人による、黒人のためのメディア」を目指して、1945 年に創刊されたメディアであり、黒人自由闘争における重要な役割を担った。孫氏は、この『エボニー』でトンプソンが 1950 年代後半から 1975 年にかけて執筆した記事を分析し、彼女が国際記者としての視点から、人種とジェンダーが折り重なって生まれるレイシズムをトランスナショナルな問題として捉えるようになっていったことを指摘する。特に、戦後日本の、アフリカ系アメリカ人兵士を父親にもつ「混血児」たちについて報じたトンプソンの記事からは、彼女がアメリカ内外のインターセクショナルな人種差別構造を可視化しよ

うとしていたことがわかるという。この報告に対し、コメンテーターの兼子歩氏は、幅広い先行研究を整理した上で、見落とされてきたトンプソンのキャリアや人生を丹念に発掘したこと、「ブラック・インターナショナル・フェミニズム」という概念を導入したことを高く評価した。その上で、トンプソンの持つ階級的不平等や資本主義的搾取への眼差し、冷戦やアフリカ独立闘争といった当時の世界的文脈における彼女の立ち位置などについて、さらなる問いを提起した。また、フロアからは彼女のフェミニズムのインターナショナリティの特殊性や、現代の黒人メディアへの継承といった連続性について質問が寄せられた。

第 2 報告では、一木優花氏が修士論文「公民権運動における黒人女性活動家の困難と貢献—SNCC(学生非暴力調整委員会)の事例を中心に」について報告した。一木氏の研究は、公民権運動において重要な役割を果たした学生非暴力調整委員会(SNCC)の黒人女性活動家を事例として、公民権運動内部において人種やジェンダー、地域性、学歴、階級、イデオロギーといった活動家の多様性がどのように作用したかということを明らかにするものであった。SNCC は 1960 年代を通じて、活動家の多様性を原動力に発展してきた一方、その多様性は軋轢や対立、そして分裂の背景にもなった。一木氏は、黒人女性活動家 3 名へのインタビューを含む、4 名の事例を通じてこうした状況を詳しく分析した。そして最終的には、SNCC における多様性への不寛容の原因は、公民権運動の行き詰まりや黒人解放運動の先鋭化、そして運動における「男らしさ」の強調にあると指摘した。この報告に対してコメンテーターの川島正樹氏は、「多様性」の二面性に着目したこと、「長い公民権運動」史観に沿った分析ができていること、そしてインタビュー調査が効果的に行われていることなどを高く評価した。その上で、論点として、イデオロギーを多様性の中の一要素として扱ってよいかという点、また社会運動における個人的経験はどこまで普遍化できるのかという点を提示した。フロアからは、インタビューの方法論や SNCC メンバーと海外教育の繋がりについて、また黒人女性活動家が SNCC の「男らしさ」といかに向き合ったかということなどについての問いが投げかけられた。

報告終了後には昨年同様に懇親会が開催され、大学の垣根を超えて多くの研究者・大学院生が参加した。2020 年以降の「コロナ禍」によって一時は途絶えていた研究交流も回復の兆しを見せ始め、ポスト・コロナの時代におけるアメリカ合衆国史研究のさらなる発展に期待が高まるなか、第 62 回例会は盛会のうちに幕を閉じた。

文責　内川創達(一橋大学・院)